

# スリランカの学校訪問記

和田 勉

長野大学

## スリランカ

2018年3月、辰己丈夫先生（放送大学）と筆者でスリランカ（スリランカ民主社会主義共和国：旧名セイロン）を訪問し、政府の教育省（Ministry of Education）およびいくつかの大学および初等中等教育機関を訪問した。当時筆者がスリランカ出身の留学生の卒業論文を指導していたことがきっかけであり当人も一時帰国していくつかの学校訪問に同行した<sup>☆1</sup>。またそれに加えて、日本への留学経験のある同国の大学の先生お二人にお世話いただいた。

スリランカは、国土面積は日本の北海道よりやや狭い65,525km<sup>2</sup>、人口は2,100万人余りであり東京都と神奈川県を合わせたよりやや少ない。主な民族は、シンハラ約75%、タミル約15%、イスラム（ムーア）約9%である。母語もシンハラ語とタミル語に分かれているが、英語が連結語として機能している。学校や公式な場にとどまらず日常生活や家庭内においても英語もかなり用いられており、駅名表示など

☆1 この調査比較研究はこの留学生の卒業研究でもある<sup>1)</sup>



図-1 駅名表示：上からシンハラ語・タミル語・英語

はシンハラ語・タミル語・英語の3言語で記されている(図-1)。

基本的に学校の学費は無料であり、これは大学（国立）も同様である。その代わり入学総定員が少なく、大学進学資格を得て進学を希望する生徒のうちわずかな人数しか入学できない。同世代人口の中でスリランカ国内の大学に進学する割合は約8%であり、大学に入学できない生徒は、外国の大学に留学するが、それを含めても大学進学率は約15%とのことである。そのほかには、スリランカ国内の教育機関が提供する外国の大学の課程を学ぶ制度を利用するか、あるいは、スリランカ放送大学（Open University of Sri Lanka）、スリランカ情報技術大学（Sri Lanka Institute of Information Technology）、工学大学（Institute of Technological Studies）、情報学大学（Informatics Institute of Technology）などの公私立の高等教育機関に進学する者もいる<sup>☆2</sup>。

## 小中高等学校

### Vishaka Balika Vidyalaya, Sapugaskanda

スリランカの初等中等教育の学校は、1つの学校の中に小学校から高等学校までに相当する学年があり、基本的に最後までその内部で進級する<sup>☆3</sup>。そのような学校の1つである、コロンボ郊外にある表記の学校（女子校）を訪問した。児童生徒は女子のみであり、上記のように小学校相当から高等学校相当ま

☆2 現地学校訪問時のインタビュー、文献1）、および駐日スリランカ大使館 Web サイト：<http://www.slembassyjapan.org/>（2020年1月2日閲覧）。

☆3 特に成績の良い一部の生徒はよりランクの高い学校に途中で移ることもできる。



で1つの構内にある(図-2)。

また教員もすべて女性であり、構内で見かけた男性は、門のところにいる守衛さんただ1人であった。女子校の教員は女性だけなのが当たり前のようで、先方の先生に「日本にも女子校はあるが、先生は女性だけでなく男性もいる」と言ったら驚いた様子だった。

生徒数は約3,300人で、ICTを専門とする先生は3人が在職、PCは28台ある。PCが設置されている教室で行われていた情報分野の授業を見学したところ、さまざまなプログラミング言語の特徴などを講義として紹介する授業であり、プログラミングそのものを行うところは確認できなかった(図-3)。また、教室の高いところに Steve Jobs と

Bill Gates の写真が貼ってあったのが印象的だった(図-4)。

これとは別の授業で、グループ討議も行っているところも見学したが、グループ討論を行う際、一部の生徒だけが別に分かれて討論をしていた。これは、多数の生徒は母語のシンハラ語で討論しているが、特に英語の能力向上を希望する一部の生徒だけが、英語で討論しているとのことである。しかし、このグループの生徒に限らず、見学中に接した生徒すべてが、我々と英語でまったく支障なく会話ができた(図-5)。

なおタミル語を母語とする子供たちはこの学校にはおらずその子供たちのための学校は別があり、それも地域的に大きくかたよりがある。

## Saegis Campus

Saegis Campus という名の学校を訪問した。ここはスリランカの制度に基づく大学ではないが、提携する外国の大学のスリランカ国内校・専門学校・外国語学校の3つを兼ねている。もらった資料では、



図-2 構内の掲示—英語のスペルはイギリス式

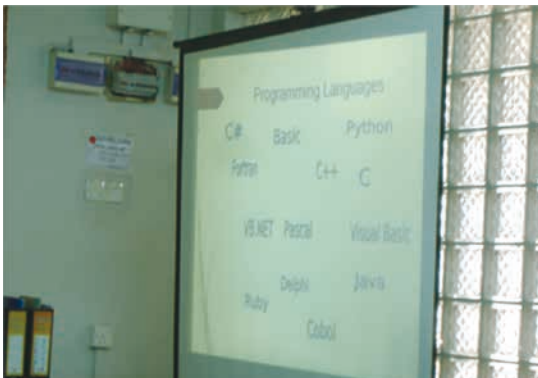


図-3 授業で提示されていたスライド



図-4 コンピュータ教室：Bill Gates と Steve Jobs の写真が掲げられていた



図-5 一般の生徒(左側)はシンハラ語で討論しているが、右側の輪の生徒は英語で討論している

国内にいたまま外国の大学に入学でき、最終学年にはそれぞれの大学に留学するコースもあることを最も前面に出している。前述のように、スリランカ国内の大学の学生総定員は少ないため進学希望者の一部しか入学できない。そのような者のために外国の大学と提携したこのような機関がある。学部および修士レベルの、コンピュータサイエンス、IT、経営、ビジネスなどのコースがある(図-6、図-7)。

なお冒頭に記した、筆者が指導する留学生(調査当時)もかつてここで学んでいた。筆者の所属大学がこと特段の関係があるわけではなく、当該留学生がここで学んだ後に日本に留学し、その後筆者の所属大学の学部編入学試験を独自に受けたものである。

## Mahinda Rajapaksa College

次に Mahinda Rajapaksa College を見学した。スリランカでは College とは単科大学や大学内の学部



図-6 Saegis Campus の授業(おそらく数学)の風景。なおこの部屋だけでは入りきらずに別の部屋にも受講生を入れて生中継していた



図-7 Saegis Campus 内のロビーに並んでいた、提携する各国大学の紹介

の意味でなく、Primary (5年)・Junior Secondary (4年)・Senior Secondary (2年)の次に学ぶところで、UniversityへはCollege (Collegiate)で2年間学んだあと入学する<sup>1)</sup>。

この学校は情報設備およびその活用が進んでいるところとして紹介を受けた。2014～2015年に韓国からの援助で「ICT教室」が作られ、それに関するこの学校の先生への研修が同国の方が来訪して行われた。ICTに加えて数学・科学・地理・歴史、および英語・日本語・フランス語の授業に使われているとのことである(図-8、図-9、図-10)。



図-8 Mahinda Rajapaksa College の「ICT教室」とその壁に掲げられているパネル。韓国語で「先端ICT教室」とある



図-9 Mahinda Rajapaksa College の「ICT教室」の大画面ディスプレイに日本語学習の教材を表示したところ



また同校は、2017年にはMicrosoft Sri Lankaによる同国西部州（首都スリジャヤワルダナプラコッテや最大都市コロンボを含む）対象のProject Smart Schoolによりシステムを整備し、Microsoft Showcase Schoolsに選出されている<sup>2)</sup>。

## 諸外国との比較調査研究

一般に外国との比較というと米国や西欧諸国にばかり目が向きがち（このことは必ずしも日本に限っ

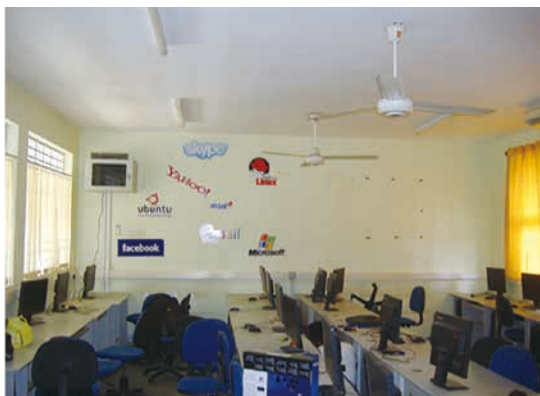


図-10 Mahinda Rajapaksa Collegeの別のコンピュータのある教室。壁には情報関係企業のロゴが並んでいる

たことではない)だが、世界の多くの国に目を向けた。今回、同国出身の留学生を初めて指導することになったという縁をとらえて、訪問しての国際比較調査を行った。高齢化が進んだ(だからこそ本来は力を入れなければならないはずの)日本とは、教育への熱の入れ方の違いを感じた。

今回、上記の3つの学校以外にも、University of Sri JayewardenepuraとMinistry of Educationを訪問し、同国の教育事情や教育政策についていろいろ伺った。それについては稿をあらためて報告したい。

### 参考文献

- 1) エディリシンハチャトリカ, 和田 勉:スリランカの初等中等・一般情報教育と情報入試・検定, 情報処理学会, コンピュータと教育研究会144回研究発表会, Vol.2018-CE-144, No.13, pp.1-5 (Mar. 2018).
- 2) Microsoft Asia News Center : Empowering Sri Lanka's Youth in the Digital Era with Microsoft (Nov. 2017), <https://news.microsoft.com/apac/2017/11/10/empowering-sri-lankas-youth-digital-era-microsoft/> (2020年1月11日閲覧). (2020年1月16日受付)

和田 勉 (正会員) wadaben@acm.org

長野大学企業情報学部教授。本会初等中等教育委員会委員長。本会シニア会員、学会活動貢献賞受賞。2006年大韓民国高麗大学師範学部コンピュータ教育学科招聘教授。1978年早稲田大学理工学部電気工学科卒業、1983年筑波大学大学院数学研究科単位取得満期退学。

## 2020年度小中高教員新規入会キャンペーン【予告】

<https://www.ipsj.or.jp/member/kyoinwaribiki-2020.html>

受付開始までもうしばらくお待ちください



**期間** 2020年4月1日～6月30日

**対象** 小中高校（相当する教育機関を含む）に教職員として勤務されている方（現職）で、新規入会者の方に限ります

### キャンペーン内容

1. 入会金（2,000円）が免除となります
  2. 正会員の2020年度の会費（10,800円）が半額（5,400円）に割引されます
- ※会員サービス内容は正会員と同じです

### 教員にとってのメリットとは

- 会誌「情報処理」が毎月読める
- 教員免許更新講習を会員価格で受けられる
- 中高生情報学研究コンテスト／Exciting Coding! Junior／初等中等教員研究発表セッションなど生徒向けや教員向けイベントを情報教育に活用できる
- 『情報』に関する豊富な知識を得ることができる
- 情報処理学会の教育委員会が発信するトピックスやパブリックコメントをいち早くキャッチできる

